

スポーツランドみやざき考

— トップアスリートと宮崎県民、AOTAIを対象に —

戸島信一（社会学）

1. スポーツランドみやざきの形成と課題

宮崎は1950年代から巨人軍のキャンプ地であり、50年あまりプロ野球のキャンプ地としての歴史を有する。温暖な気候、特に冬場に快晴の日が多いという気象条件を活かし、観光業界、ホテルや旅館業者によって熱心なキャンプ誘致が進められてきたし、そのための施設の整備が推進されてきた。1996年にそれまでホテル・旅館だけの誘致活動から、県と観光協会が参画したスポーツランドみやざき推進協議会が設置されるに至り、広報活動の展開や窓口の1本化が図られた。県内の各競技施設の予約状況・空き状況を県観光推進課と（財）みやざき観光コンベンション協会が一括して把握し、キャンプの問い合わせ・要望に迅速に対応しており、現地案内、打ち合わせまでスムーズに対応している。施設の利用実績も一括して把握することによって広報活動に反映され、さらに効率よい効果的な誘致活動に繋がられている。そのことによって1994年にはスポーツキャンプへは、326団体47,145人の延べ参加人数であったが、96年には478団体78,565人の延べ参加人数と増加した。さらに2000年には698団体90,671人、2004年には878団体115,399人、そして2007年には1,041団体162,148人にまで増加してきた。

県内の30市町村の内スポーツキャンプに関わった市町村は22に及んでいる。マスコミでは、プロ野球やJリーグのプロのサッカーチームのキャンプがよく話題にされるが、2007年度の場合、社会人164団体、学生825団体であり、プロのチームは52団体であった。確かに観客はプロのチームに集まるが、キャンプの主流はむしろアマチュアのアスリート達である。またプロ野球のチームは最近沖縄にキャンプ地を変更したチームもあり、2009年は巨人（セリーグ優勝）、広島、西武（パリーグ優勝、日本シリーズ優勝）、ソフトバンクの4チームとヤクルトのファームであったが、WBCのキャンプが行われ、例年にない賑わいをみせた。またサッカーはJリーグのチャンピオンチームや有力チームである鹿島アントラーズや、ガンバ大阪、浦和レッズをはじめ過去最高の18のプロチームが宮崎でキャンプを行った。2008年の観客動員数は61万1千人、経済効果83億5百万円であったが、2009年はこれを大きく上回ることは間違いない。

このように、スポーツランドみやざきの構想は、キャンプの誘致活動で目覚ましい成果をあげてきた。しかしこの構想はそれに終わらず、宮崎県におけるスポーツ文化の形成とその展開に目標がある。キャンプ誘致活動に終始しては、単なる見る観光の1つとしての観光産業にすぎない。スポーツランドみやざき構想は県外のスポーツ選手や見物客の誘致運動ではない。本稿では県民自らスポーツ文化に勤しむスポーツランドみやざきの形成に向けての現状と課題を国際青島太平洋マラソンを対象にして分析することにする。

2. 宮崎県のスポーツランド戦略

2005年に策定された宮崎県総合長期計画「元気みやざき創造計画」の中で、「健康立県」と「環境立県」が2本柱にされており、「元気」の構成要素として「スポーツランドみやざき」プロジェクトは6つの分野横断プロジェクトの1つに位置づけられている。具体的な施策として掲げられているのは以下の3つの分野である。

(1) スポーツを通じた経済の活性化の推進

スポーツキャンプ・合宿の拡大、スポーツイベントの開催、スポーツ体験プログラムの提供、スポーツランドみやざきの発信

(2) スポーツを通じた元気な人づくり戦略

スポーツを通じた自主的な健康づくりの推進、障害者や高齢者のスポーツの振興
スポーツランドにふさわしいレベルの向上、アスリート育成基地の形成

(3) スポーツを核とした地域づくり戦略

スポーツを通じたコミュニティづくり、地域における青少年の育成、各地域のシンボル
スポーツを核とした地域づくりの推進。

このように、(2)に掲げられているような、スポーツを通じての県民の健康づくりや人づくりの課題、そして(3)の地域づくりの一環にも掲げられ、大変興味ある政策であり、総合的な施策である。

3. AOTAIの経緯と参加者数の動向

現在では国際青島太平洋マラソンというのが正式名称であるが、親しみを込めて宮崎の人々にはAOTAIと呼ばれている。同大会は、1987年11月に開催された第1回宮崎太平洋マラソンと1988年4月に開催された第1回青島・海さち山さちマラソン大会が統合されて、1988年12月に第2回青島太平洋マラソン大会として開催された。当初は20kmが最長であり、青島をスタート・ゴールにしていたが、1990年第4回大会からフルマラソンが開始され、総合運動公園をスタート・ゴールにするようになった。また第6回大会から視覚障害者の部門も設けられている。

その参加者の動向についてまず男子について表1および図1に示した。もともと、青島地区のホテル・旅館街が宿泊客を確保する戦略の一環として大会が取り組まれたこともあって、開催当初はあまり多くの参加者は得ていないが、おからのジョギングブームの影響を受けて、1990年代前半は急速な参加者の増加を見た。しかし、1996年を1つのピークにしてその後は停滞気味に推移する。フルマラソンの大会が全国各地で開催されるようになったことや、同日に3万人規模で日本人の参加者が多いホノルルマラソンが開催されていることの影響も考えられる。また年齢別に見れば20才代、30才代、40才代が伸び悩む中で、50才代、60才代が順調に増加するという特徴があった。しかし、2006年を底に再び増化傾向に転じる。減少・停滞傾向にあった、最も多い参加の40才代が増加傾向に転じ、30才代、20才代も増加傾向になり、ほぼ一貫して増加してきた50才代、60才代も増加のテンポが上がっている。

さて女子の動向を、表2および図2に示した。開催当初の女性の参加者はわずか51人であり、男性の1/16という数である。3桁に達するのが1994年であり、1999年まで順調に増加を続けたが2000年代前半停滞傾向を示した。そしてこの2年で2倍の増加という急激な動きを見せた。女性の参加者は4桁になり、男性の1/5近くになった。男性に比べ、女性のフルマラソンの歴史は浅い。女性のフルマラソン参加が公式に認められたのは、1972年のボストンマラソンであり、女性だけの大会は東京国際女子マラソン1979年に始まり、オリンピック種目になったのも、1983年のロスアンゼルスオリンピックからである。しかし、女性のマラソンは長い間トップクラスのアスリートだけの世界であった。男性のように市民ランナーに普及してきたのはごく最近のことだと考えて良い。

また、年齢別に見ると、男子は40代がほぼ一貫して首位であり、次いで30才代、50才代、20才代となるが2001年以降50才代が20才代を恒常的凌ぐようになってきた。男性の増加は熟年ランナー達の増加に依存している。また女子では20才代、30才代、40才代がほぼ同数で推移してきている。女子の場合は2000年以降の近年に実に3倍に増加しており、この間の男性の1.26倍の伸びを大きく上回る急速な伸びを示した。フルマラソンが男性の若者や中年のスポーツから、男性の熟年層そして女性も参加するスポーツへの大きく変化してきた。

このように、AOTAIの参加者の動向にも現れているように、最近の参加者の増加を第2次ジョギングブームが到来していると見て良い。これはメタボ対策(というよりバッシングと

表1 国際青島太平洋マラソン男子の年齢階層別エントリー者数の推移
 単位：人、倍

	男子					合計
	～29才	30～39	40～49	50～59	60才以上	
1990	151	307	221	87	18	784
1992	271	494	416	165	40	1,386
1993	330	456	357	133	22	1,298
1994	518	609	662	259	61	2,109
1995	748	773	920	359	78	2,878
1996	863	956	1,284	454	137	3,694
1997	790	945	1,216	493	119	3,563
1998	731	933	1,265	610	140	3,679
1999	759	1,018	1,304	721	176	3,978
2000	923	1,147	1,441	860	236	4,607
2001	814	1,056	1,304	876	235	4,286
2002	869	1,172	1,312	974	260	4,587
2003	807	1,128	1,301	933	300	4,469
2004	797	1,004	1,185	893	308	4,187
2005	731	983	1,183	951	308	4,156
2006	596	940	1,162	974	370	4,042
2007	863	1,196	1,360	1,172	496	5,087
2008	1,063	1,452	1,483	1,233	583	5,814
2008/1990	7.04	4.73	6.71	14.17	32.39	7.42
2008/2000	1.15	1.27	1.03	1.43	2.47	1.26

図1 国際青島太平洋マラソン年齢階層別参加者数の推移（男子）

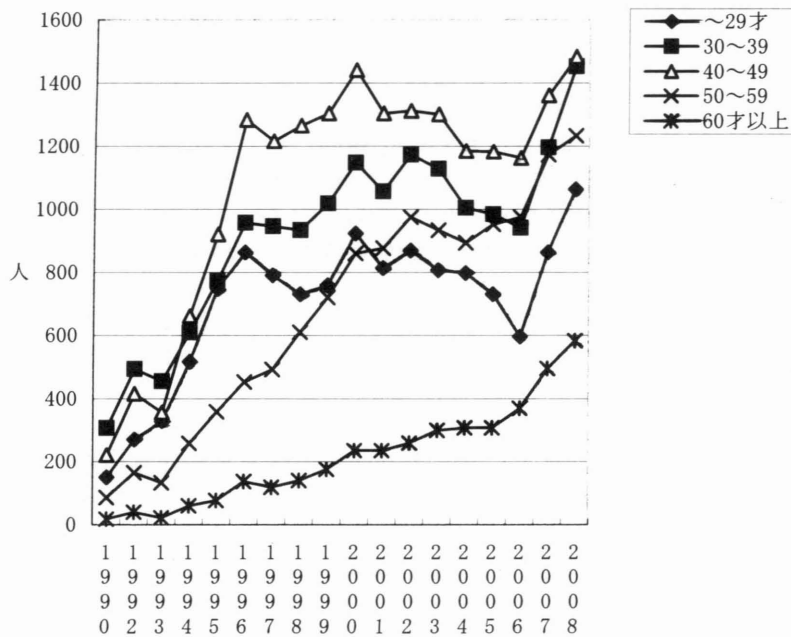
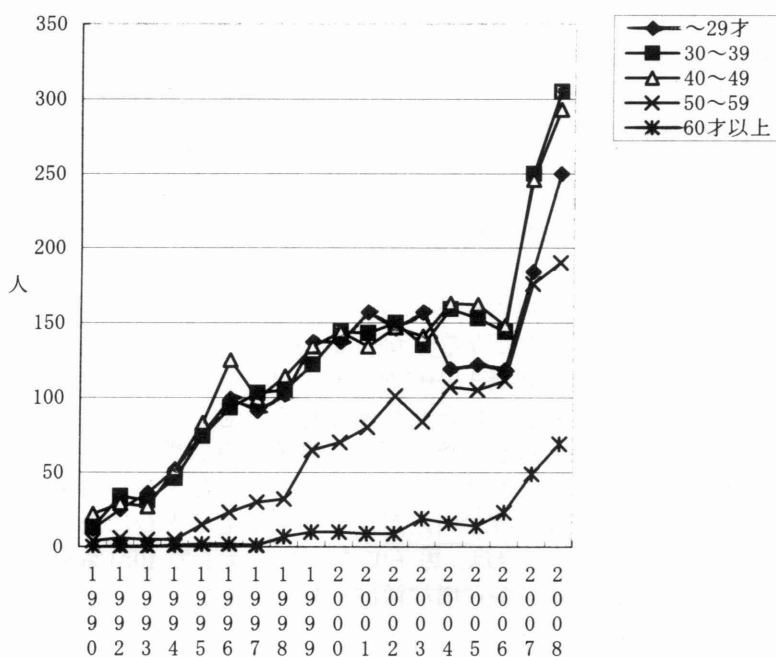


表2 国際青島太平洋マラソン女子の年齢階層別エントリー者数の推移
(単位：人、倍)

	女子					合計
	～29才	30～39	40～49	50～59	60才以上	
1990	12	13	22	4	0	51
1992	25	34	29	6	0	94
1993	36	31	27	5	0	99
1994	52	46	52	5	1	156
1995	76	74	83	15	2	250
1996	99	93	125	23	2	342
1997	91	103	99	30	1	324
1998	102	105	114	32	7	360
1999	137	122	134	65	10	468
2000	137	144	144	70	10	365
2001	157	143	134	80	9	523
2002	146	150	147	101	9	553
2003	157	135	141	84	19	536
2004	119	159	163	107	16	564
2005	122	153	162	105	14	556
2006	118	144	148	111	23	544
2007	184	250	246	176	49	905
2008	250	305	293	190	69	1,107
2008/1990	20.83	23.46	13.32	47.50		21.71
2008/2000	1.82	2.12	2.03	2.71	6.90	3.03

図2 国際青島太平洋マラソン年齢階層別参加者数の推移 (女子)



して展開している)をはじめ、生活習慣病対策、禁煙運動、健康ブームが背景にあるものと思われる。ちなみに、2007年から始まった東京マラソンは、初年はフルマラソン2万5千に人に対し応募者はその約3倍、2008年は約5倍、2009年には定員を3万人に増やしたが、応募者は約7倍の22万人に達した。走りたい人の7人に1人しか出走できないという厳しい競争になっている。ランナーズ誌によれば、国内の大会でのフルマラソン完走者(男女計)は2004年度(4月から翌年3月まで)の78,776人、2007年度の114,520人この5年間で35,744人、45.4%の増加をみている。これには先ほどの新しく始まったビッグな東京マラソンの影響が大きい、完走者の内女性は19,442人でその割合は20.5%になった。

4. A O T A I への宮崎県民の参加状況

A O T A I は、ここ数年全国の全都道府県からの参加者を得ており、人気の高い大会である。最近再び参加者が増加傾向を示すようになり、宮崎県のイベントとしても大いに期待がもたれ、地元紙も熱心に取り上げるようになり、応援が増えるようにとコースも市街地の真ん中を通るように変更された。だが、先述のように冬場オフシーズンの宿泊客獲得の戦略として始められたこともあって、今まで航空会社とも連携して関東、関西を中心とする県外からの参加者の確保に力が注がれてきた。スポーツランドみやざきの戦略からすれば、宮崎県民の参加動向が気になることである。そこで、表3を作成した。筆者はこの間11年連続A O T A I を完走しているが、その大会パンフから県民の参加動向を分析してみた。1998年では、29才以下の男子では県民の割合が50.3%と半数を占め、また同年齢層の女子でも40.2%と高い比重を占めているが、その他の年齢層ではほとんど2割台に留まり、男子では全体でも32.2%、女子では30.3%である。そして2003年、2007年と県民の割合はむしろ低下していく。これは県内の参加者も少しは増加してはいるが、県外からの参加者がそれを上回る増加を見せたからである。その状況を分析したのが表4である。1998年から2003年にかけては、男子で増加数の98.1%は県外によって占められ、女子でも84.1%を県外の増加が占めた。また2003年から2007年にかけても、増加の内男子で76.7%、女子で89.2%が県外者の増加による貢献である。さらに、年齢別に見ると県内の20才代、30才代、40才代の増加は極めて弱く、減少している場合もあり、着実の増加しているのは50才代、60才以上である。このように1998年から2007年のいわば参加者数の伸び悩んでいた間は、参加者数の県内の比重は低下傾向にあり、スポーツランドみやざきのお膝元としては、寂しいものがあった。大会は圧倒的に県外の参加者に依存して実施されていたのである。

だがこの1年で状況が変化してきた。2008年の県内の参加者は、前年に比べ男女とも全ての年齢層にわたって顕著な増加傾向を示した。増加率でみると女子60才以上の100%、同じく同世代男子の63.4%の増加という高年齢(熟年層)の著しい増加をはじめ、男子全体で41.8%、女子で45.8%の増加を見た。フルマラソンの参加者はいきなり増やそうと思っても増えるものではない。相当の準備期間、練習が必要だからである。数でいうと男子の増加数562人、女子のそれは81人であり、1年間でこれだけの新しくフルマラソンチャレンジする人々が出現したことになる。県内の参加者は長いこと千人台に留まっていたが、ようやく2千人台に乗ったのである。この1年での増加数に占める県内の増加割合は、男子で77.3%、女子で40.1%を占める。これによって県内参加者のシェアが低下傾向から増加傾向に転じてきた。

5. 県民のためのスポーツランドへ

温暖で風光明媚な宮崎県は観光産業が重要な部門であることはこれからも変わらないであろう。だが、大型リゾート開発政策が大きな禍根を残したように、時代の流れを読み違えると痛手は大きい。キャンプ地みやざきは、「見る観光」から「する観光へ」の変化の中で生まれてきた。しかしアスリート達に取っては「する観光」、スポーツの練習の場ではあっても、そこに集

表3 国際青島太平洋マラソンの県内・県外別、年齢別エントリー者の推移

(単位：人、%)

			1998	2003	2007	2008
男	～29才	全体	731	807	863	1,063
		宮崎県	368	340	392	530
		構成比	50.3	42.1	45.4	49.9
	30～39	全体	933	1,128	1,196	1,452
		宮崎県	271	286	309	486
		構成比	29.0	25.4	25.8	33.5
	40～49	全体	1,265	1,301	1,360	1,483
		宮崎県	353	318	315	425
		構成比	27.9	24.4	23.2	28.7
	50～59	全体	610	933	1,172	1,233
		宮崎県	161	200	245	330
		構成比	26.4	21.4	20.9	26.8
60才以上	全体	140	300	496	583	
	宮崎県	32	55	82	134	
	構成比	22.9	18.3	16.5	23.0	
合計	全体	3,679	4,469	5,087	5,814	
	宮崎県	1,185	1,199	1,343	1,905	
	構成比	32.2	26.8	26.4	32.8	
女	～29才	全体	102	157	184	250
		宮崎県	41	54	57	81
		構成比	40.2	34.4	31.0	32.4
	30～39	全体	105	135	250	305
		宮崎県	25	19	43	67
		構成比	23.8	14.1	17.2	22.0
	40～49	全体	114	141	246	293
		宮崎県	34	36	45	56
		構成比	29.8	25.5	18.3	19.1
	50～59	全体	32	84	176	190
		宮崎県	8	25	27	44
		構成比	25.0	27.8	15.3	23.2
60才以上	全体	7	19	49	69	
	宮崎県	1	3	5	10	
	構成比	14.3	15.8	10.2	14.5	
合計	全体	360	536	905	1,107	
	宮崎県	109	137	177	258	
	構成比	30.3	25.6	19.6	23.3	

(各年の大会パンフより集計)

表4 国際青島太平洋マラソンのエントリー者の男女別、年齢別、県内・県外別増減

(単位：人、増減率%)

		1998～2003	2003～2007	2007～2008	1998～2008	
男	全 体	～29才	76(10.4)	56(6.9)	200(23.2)	332(45.4)
		30～39	195(20.9)	68(6.0)	256(21.4)	519(55.6)
		40～49	36(2.9)	59(4.5)	123(9.0)	218(17.2)
		50～59	323(52.9)	239(25.6)	61(5.2)	623(102.1)
		60才以上	160(114.3)	196(65.3)	87(17.5)	443(316.4)
		合計	790(21.5)	618(13.8)	727(14.3)	2,135(58.0)
	子 宮 崎	～29才	△ 28(7.6)	52(15.3)	138(35.2)	162(44.0)
		30～39	15(5.5)	23(8.0)	177(57.3)	215(79.3)
		40～49	△ 35(9.9)	△ 3(0.9)	110(34.9)	72(20.4)
		50～59	39(27.8)	45(22.5)	85(34.7)	169(105.9)
		60才以上	23(71.9)	27(49.1)	52(63.4)	102(318.8)
		合計	14(1.2)	144(12.0)	562(41.8)	720(60.8)
増加 内訳	県内	14(1.8)	144(23.3)	562(77.3)	720(33.7)	
	県外	776(98.2)	474(76.7)	165(22.7)	1,415(66.3)	
女	全 体	～29才	55(53.9)	27(17.2)	66(35.9)	148(145.1)
		30～39	30(33.8)	115(85.2)	55(22.0)	200(190.5)
		40～49	27(23.7)	105(74.5)	47(19.1)	179(157.0)
		50～59	52(162.5)	92(109.5)	14(8.0)	158(493.8)
		60才以上	12(171.4)	30(157.9)	20(40.8)	62(885.7)
		合計	176(48.9)	369(68.8)	202(22.3)	747(207.5)
	子 宮 崎	～29才	13(31.7)	3(5.6)	24(42.1)	40(97.6)
		30～39	△ 6(24.0)	24(126.3)	24(55.8)	42(168.0)
		40～49	2(5.9)	9(25.0)	11(24.4)	22(64.7)
		50～59	17(212.5)	2(8.0)	17(63.0)	36(450.0)
		60才以上	2(200.0)	2(66.7)	5(100.0)	9(900.0)
		合計	28(25.7)	40(29.2)	81(45.8)	149(136.7)
増加 内訳	県内	28(15.9)	40(10.8)	81(40.1)	149(19.9)	
	県外	148(84.1)	329(89.2)	121(59.9)	598(80.1)	

(大会パンフより分析。なお、増加内訳のかつこ内は、増加に占める県内と県外の割合を示す)

まる見物客はあくまでも「見る観光」の1つである。

スポーツランドみやざきは、今まで主にアスリートのキャンプ誘致であった。フルマラソン大会への参加という「する観光」としてのAOTA Iも多くの県外からの宿泊参加者を得るための大会としての性格が強かった。

しかし、本稿で分析してきたように、近年ようやく県民自らがスポーツに勤しむ傾向が出てきた。成熟社会における食生活の豊かさの実現と、それによる生活習慣病の増加、その対策としての健康管理や身体管理の必要性が高まってきた。健康ブームはスポーツの大衆化を生みだし、その1つとしての手軽に、誰でも、いつでも、何処でもできるジョギングが広く取り入れられるようになった。しかし、日常的に継続するには目標が必要であり、そのためにレースへの参加がなれさるようになる。そのレースの頂点がフルマラソン大会である。本稿でフルマラソンの参加者の動向を分析したのは以上のような位置づけからである。かつては、トップアスリートのごく一部の人たちの世界のものであったフルマラソンが大衆化した。それは「よばきぼ」の多いといわれる宮崎県民をも巻き込み始めており、県民へのスポーツ文化の広がり、真のスポーツランドみやざきが実現する可能性がでてきたのではないだろうか。

参考文献

- 『宮崎県総合長期計画』 2005年
日本経済新聞 2009年2月13日付
宮崎大学教育文化学部社会学ゼミ社会調査演習Ⅱ報告書『マラソンにチャレンジする美しき女性ランナーの意識と行動』2008年
ランナーズ編集部『フルマラソン1歳刻みランキング記録集』2007.4-2008.3 2008年
国際青島太平洋マラソン大会パンフ各年
亀山佳明編『スポーツの社会学』世界思想社 1996年
八木田恭輔編『スポーツ社会学』嵯峨野書院 2002年
高津勝『スポーツ社会学の可能性』創文企画 2008年